お

国語問題

はじめに、これを読むこと。

1. この問題用紙は十二ページある。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し、確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に記述すること。
5. 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもＨＢ・黒)で記入すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定の欄以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. **解答用紙は、持ち帰らないこと。**
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. この試験時間は、六〇分である。
12. 解答をマークする場合は、下の記入例を参照して、正しくマークすること。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
●	◉ ⊗ ◍

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

チェザーレ・パヴェーゼの日記には「何月何日のところに……ということを追加」あるいは「何月何日に書いたことからは……という結論になる」といった記述がしばしば登場してくる。しかも追加される内容は、当日は記さずにあとになって思い出した出来事ではなく、きわめて［　I　］である。ただひたすら自分の日記に読みふけっている作者の孤独な姿がありありと浮かんでくるようだ。日記(いちいち断わるのはわずらわしいので、ただ日記とだけしておくけれども、journal intime 正しくは個人がその内面を記した日記)をつけること自体、あるいはそれを公刊さえすることを、近代精神の《病い》と呼んだポール・ブルジェであれば、病いはここで極頂にまで達したと評したかもしれない。だが、いかに病気と呼ばれようとも、ある種の人びとにとって、日記はただ毎日つけるだけでは充分ではない。それを繰り返し読み、かつ意見を追加してゆかなければいけないのだ。再読と記述の追加とは、日記を書くという行為の何か本質的な部分につながっている。

というのも、ここでは日記を一つの保存装置、とりわけ《自己》を保存する容器と考えたいのだが、何であれ、また何のためであれ、保存するということは、その保存したものを将来いつか取り出してくるのを前提としているはずだからである。今日つくったジャムをいつかは食べるなどとはまったく考えもしないで、壜に密封するひとがいるだろうか。もっとも、時が経つにつれて、保存したことそのものを忘れてしまう場合はあるけれども――われわれの多くの日記のつけ方はこれにあてはまるだろう。しかしパヴェーゼは、けっして忘れることなく、ときどき壜のふたを開いてはジャムを少しずつ舐めるような具合に、自分の日記を読みかえし、そのうえ新たな味つけまでしているのだ。つまり保存という作業の基本を忠実に守っているわけである。

だがそれにしても、保存するものがジャムであるのと自己であるのとでは、保存の姿勢がずいぶんと変わってくる。ジャムの保存は、密封した壜をあけて内容物を消費しつくした時点でその目的は達成され完結する。他方で日記の再読にあっては、保存の対象はある種のかたちで消費されるとはいえ、しかし減少することはけっしてなく、逆に、記述の追加をとおしてたえ

ず自己増殖をつづけてゆくだろう。このちがいは小さくない。保存したものが自己増殖するという点で、日記を書くということは、むしろ蓄財やあるいは切手、昆虫などの収集に似ているかもしれない。日記に記された内面と同様に、資本もまた自己増殖をつづける――少なくとも最初からそれが消滅することは願われていない――のであり、しかもそのことを確認するために、資本家はたえず帳簿に目を通さなくてはならない。切手の収集家もまた、日毎ふえてゆく収集品を前にしてほくそえみ、逆に、せっかく集めたものがたった一つでもなくなればひどく嘆き悲しむであろう。

古代以来の日記文学の伝統のあるわが国は措[a]くとして、ヨーロッパにおいては、日記の発達は商人のつける会計簿に一つの起源があるようだ。言いかえれば、自己の内面を日記に綴るということは、自己を一種の財と見なして蓄積することであり、それは一方で資本主義、他方で個人主義という、ともに近代ヨーロッパの根幹をなすとも言うべき考え方の成長をまってはじめて現実のものとなった。収集がただの趣味以上のものとして広く行われるようになるのも、おそらくはブルジョワ社会においてのことであって、ここでも同じ原理が作動している[B]はずである。ただし、財の蓄積、保存とは言っても、収集や蓄財の場合に対象となるのはいつでも他の財と交換が可能な財であり(たとえば貯めたお金で家を購入する)、したがってこの保存はまだ目的のための手段という性格を多少とも残しているのにたいして、日記に記される自己の他のものに変わりうる余地はほとんどない。[C] Ⅱ 、日記においては手段の自己目的化が蓄財や収集にもましていっそう激しく進行するのだが。

資本家の帳簿とほとんど等価な自己の記録、つまり何ごとかのための手段として記される日記は、しかし、たしかに存在している。いやそうした日記のほうがむしろ多数であるのかもしれない。明日のより多くの収入を念じながら今夜のうちに会計簿の記帳を怠らない商人と同じ姿勢で、よりよい自己の実現、向上をめざして、とりわけ反省に多くの部分をさいて綴られる日記である。「菓子を食ひすぎたり、菓子は之より断然廃すべし」と明治三〇年に記したのは西田幾多郎であるが、殖産興業の理念が支配するこの時代に即応して発行された博文館の常用日記のなかに同様の反省を書きつけたひとは、西田以外にも少なくはなかっただろう。ここでは明らかに、自己の内面を記録することは、克己、向上という目的に従属した手段にとどまっている。これにくらべるならば、先のパヴェーゼの日記、また「日記は私の社交界、私の仲間」であると記すアミエルの日記は、外部への道を閉ざされ、自己の向上をめざすかわりに、ひたすら自己への沈潜・耽[b]溺に終始している点で対照的な性格の日記

である。

おそらくは、堅実な(つまり一定の目標をもった)資本家がやがて金をためることだけが目的のシュセンドに堕し、また博物学的興味から何かの収集をはじめたはずの収集家がいつのまにか集めることそれ自体に情熱を傾けるにいたるのと同じ過程でもって、向上のための自己の記録が、自己というものに執着し沈潜する日記に転じたのだった。この自己目的化あるいは自己疎外は、やはり逸脱、倒錯そして結局のところ病いとしか呼びえないものだろうか。そうではあるにせよ、しかし注目しなければならないのは、こうした逸脱が実は近代社会に内在する性格の縮図にもなっているという点である。たとえば美術館、博物館また古文書館など、その制度化と公開が近代以前の社会では考えられなかったのを思い出すならば、われわれの社会においては、個人のレヴェルで収集癖や日記の習慣が定着するとともに、全体としても、単純な消費の対象とはならない知識や財を記録し保存し、要するに永遠化することに多大のエネルギーが投じられているのがわかる。自己の記録にコウデイする日記の向こう側に透けて見えてくるのは、近代以降の社会に生きるわれわれに宿命的なフェティシズムにほかならない。

日記が保存する対象は、壜詰のジャムとは、またお金や収集品とさえ異なる、きわめて特殊な財であり、それゆえに日記は、あらゆる保存装置のうちでもっとも完全なあるいは忠実な、ということはもっとも［Ⅲ］装置になってしまった。こうした出口のない迷路のような日記は、しかし、保存という行為の本質を何にもまして純粋に守り、いかなる現実の目的にも拘束されないだけに、逆にある種の自由ないし解放を作者にもたらしもするとは言えないだろうか。日記の機能を極度に追求した日記は、自己にとって牢獄であるとともに、想像力がはばたきはじめる場所でもあるのだ。自己目的化ということでは共通している蓄財や収集癖も、依然として事物とのつながりを残している点で、日記の純粋さには及ばない。同じく毎日綴られながらも、備忘録や反省の記録にあっては、記憶は個々の現実のなかで消費し尽くされて姿を消してしまう。これにたいして、たえず自己にまつわる記憶をカンキし、それを想像力に結びつけて、存在の感覚を確認すること――これこそが、パヴェーゼのような日記作家の、自分の日記を再読し新たな記述を追加するさいの、一見したところ苦渋にみちてはいるが、それでも他の何ものにも換えがたい楽しみであったにちがいない。

(富永茂樹『都市の憂鬱』より)

（注）チェザーレ・パヴェーゼ ―― 一九〇七～一九五〇。イタリアの詩人・小説家。
journal intime ―― フランス語。公開を目的としない私的な日記。
ポール・ブルジェ ―― 一八五二～一九三五。フランスの小説家・批評家。
西田幾多郎 ―― 一八七〇～一九四五。日本の哲学者。
博文館 ―― 明治期に創業した著名な出版社。「常用日記」はそのベストセラー商品として知られる。
アミエル ―― アンリ・フレデリック・アミエル。一八二一～一八八一。スイスの哲学者・詩人。

問一　傍線ア「シュセンド」、傍線イ「コウデイ」、傍線ウ「カンキ」をそれぞれ漢字に改めて記せ。

問二　傍線a「措(く)」、傍線b「耽溺」の漢字の読みをそれぞれひらがなで記せ。

問三　空欄 Ⅰ にあてはまる最も適切なものを次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。
① 具体的な備忘　② 個人的な追憶　③ 断片的な記憶　④ 抽象的な思念

問四　空欄 Ⅱ にあてはまる最も適切なものを次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。
① それとは裏腹に　② とはいいながら　③ それゆえにこそ　④ さらにそうして

問五　空欄 Ⅲ にあてはまる最も適切なものを次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。
① 功利的　② 堅固な　③ 不幸な　④ 開放的

問六　傍線A「意見を追加して」を比喩的に言い換えた部分を本文中より十字の語句で抜き出して記せ。

問七　傍線B「同じ原理が作動している」とあるがどのような原理か、本文中よりそれを示す十三字の語句を抜き出して記せ。

問八　傍線C「資本家の帳簿とほとんど等価な自己の記録」とはどのようなことか、次の中から最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 自己の向上と実現とを目指して反省的に記される日記。
② 資本家のように余念なく富を追求するために記される記録。
③ 資本家のように優越性を周囲に誇示するために記される記録。
④ 自己の体験を後の世代に伝えようと教訓的に記される記録。

問九　傍線D「こうした逸脱が実は近代社会に内在する性格の縮図にもなっている」のはどうしてか、次の中から最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 向上と克己とを執拗に目指して自己の生活の諸断片を収集しようとするから。
② 自己なるものをかけがえのない神のような何かとして崇拝し尊重するから。
③ 内面的な対話を喪失した生活記録により自己を永遠なるものとして追求するから。
④ 自己をいつか社会に公開したいという強い利己的欲望に翻弄されているから。

問十　傍線E「自己にとって牢獄であるとともに、想像力がはばたきはじめる場所でもある」とはどのようなことか、次の中から最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 現実世界における目標を失った迷路であると同時に、透徹した目で自己を見詰める場所でもある

② 現実世界において自らに克己を強いると同時に、空想世界では他者から無限に遊離することのできる理想的な場所でもある

③ 現実世界では多大なエネルギーを浪費するものであると同時に、個人的に書くことの愉しみを純粋に満喫できる場所でもある

④ 自己を著しく閉塞させるものであると同時に、現実世界の目的から一切解放された自由な場所でもある

二　次の文章は『平治物語』の一節で、平治の乱で敗れた源義朝（頭殿）が東国に落ちていった様子を、義朝の従者が常葉（義朝の妻）に報告した部分である。これを読んで、後の問に答えよ。（一部表記を改めた箇所がある）

不破の関、固めて候ふと聞こえし程に、ふかき山にかかりて、しらぬ道をわけまよはせ給ふ。雪ふかくて御馬をばすて、木に取り付き、萱にすがり、嶮岨をこえさせ給ふに、兵衛佐殿、A御馬にてこそ大人と同じやうにおはしし、かちにてかなはせ給はず、御さがり候ひぬ。頭殿、深雪の中にやすらはせ給ひて、「兵衛佐、兵衛佐」と仰せられ候ひしかども、1御いらへもなかりしかば、「あな、むざんやな。はや、さがりにけり。人にや生捕られやすらん」と、御涙をはらはらとおとさせ給ひ候ひし時、B人々、袖をこそしぼり候ひしか。

鎌倉の御曹子をよび参らせて、「わ君は、甲斐・信濃へ下りて、山道よりせめ上れ。義朝は東国へ下りて、海道よりせめのぼらんずるぞ」と、仰せられしかば、悪源太殿は飛騨の国のかたへとて、ただ御一所、山の根に付きておちさせ給ひ候ひぬ。

美濃国青墓の宿と申す所に、大炊と申す遊君は、頭殿のとしごろの御宿の主なり。その腹に姫御前一人まします。この屋へつかせ給ひぬ。鎌田兵衛も、［　　］うたひの延寿がもとへつき候ひぬ。この遊女ども、さまざまにもてなしまゐらせ候ひし最中に、在地の者ども、「この宿に落人あり。さがしとれ」と、2ひしめき候ひしに、頭殿、「いかがはせん」と仰せられ候ひしを、佐渡式部大夫重成殿、「御命にかはりまゐらせん」とて、頭殿の錦の御直垂をとってめし、馬にひたとのらせ給ひて、宿より北の山ぎはへ馳せのぼり給ひしほどに、宿の人、追懸け奉りしほどに、式部大夫殿、金作の太刀をぬいて、きゃつばらを追っぱらひ、「をのれらが手には、かかるまじきぞ。われをば誰とか思ふ、源氏の大将、左馬頭義朝」となのり、御自害候ひぬ。宿人等、「左馬頭義朝、うちとどめたり」と悦びて、大炊が後苑の倉屋に、頭殿、かくれてましますをば知らず。

夜に入りて、頭殿、宿を出でさせ給ふ所に、中宮大夫進朝長、竜華越の軍に膝のふしを射させて、遠路を馳せ過ぎ、ふかき雪をかちにてわけさせ給ひしほどに、腫れ損じて、一足もはたらかせ給ふべきやうなし。「この痛手にて、御供申すべしとも覚えず。とうとういとまたばせ給へ」と申されしかば、頭殿、C「こらへつべくは供せよかし」と、よにあはれげにて仰せられし

かば、大夫進殿、涙をながさせ給ひて、「かなふべくは、いかでか御手にかからんと申すべき」とて、御頸をのべさせ給ひたりしを、頭殿、やがて打ちまゐらせて、きぬ引かづけまゐらせて、「大夫進が足をやみ候ふ。不便にし給へ」とて、出でさせ給ひぬ。

（注）兵衛佐殿 ―― 源頼朝。義朝の三男。　鎌倉の御曹子・悪源太殿 ―― 源義平。義朝の長男。
山道 ―― 東山道の略称。　海道 ―― 東海道の略称。
青墓 ―― 岐阜県大垣市青墓町にあった宿駅。　鎌田兵衛 ―― 鎌田正清。義朝の乳母子。
佐渡式部大夫重成 ―― 源氏の一族で、源重実の子。　中宮大夫進朝長 ―― 源朝長。義朝の二男。
竜華越 ―― 京都市左京区大原から滋賀県大津市竜華に至る峠道。

問一　傍線1・2を口語訳せよ。
1　御いらへもなかりしかば
2　ひしめき候ひしに

問二　（1）空欄［　］には平安時代末に都で大流行した、「当世風、現代風」という意の歌謡の名称が入る。これを漢字で答えよ。
（2）後白河院が編纂したこの歌謡の歌詞集の名称を、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。
①　和漢朗詠集　②　撰集抄　③　梁塵秘抄　④　閑吟集

問三　傍線A「御馬にてこそ大人と同じやうにおはししか、かちにてかなはせ給はず」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 御馬では大人と同じように戦っていらっしゃったが、勝つことはおできにならずに
② 御馬では大人と同じように振るまわれていたが、徒歩ではついておいでになれずに
③ 御馬では大人と同じように踏みとどまっておられたが、あと少しのところで勝ちきれずに
④ 御馬では大人と同じように逃げておられたが、徒歩では無理をなさろうとせずに

問四　傍線B「人々、袖をこそしぼり候ひしか」という状況になった理由としてふさわしいのはどれか。次の中から最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 頼朝のことを心配する義朝の父としての姿に心打たれたから。
② 落ち延びる際に頼朝を見捨ててしまったことを悔やんだから。
③ 父を思い一人でけなげに行動する頼朝の意志に感動したから。
④ 源氏の子孫が絶えるかもしれないと考えると無念であるから。

問五　波線a「候ひ」、b「まゐらせ」、c「給ひ」、d「まします」の敬語のうち、義朝に対する敬意を表しているものを全て選び出して、その番号をマークせよ。（一つとは限らない）

① 候ひ　② まゐらせ　③ 給ひ　④ まします

問六　傍線C「こらへつべくは供せよかし」にこめられた心情として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 弱気になった朝長をふがいないと思う気持ち。
② 武士らしく行動できない朝長を哀れむ気持ち。
③ 朝長の傷の悪化は自分のせいだと思う気持ち。
④ けなげな態度をとる朝長をいとおしむ気持ち。

問七　本文で述べている内容に合致するものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 義朝とその子である義平は、源氏再興を期し、残った軍勢を手分けして別行動をとり、落ちることにした。
② 美濃国青墓の遊女たちは頼朝と鎌田兵衛をもてなしたが、在地の者にこっそり知らせて落人をおそわせた。
③ 義朝が言外に求めていることを察知した重成は、身代わりになることを申し出て見事その役目を果たした。
④ 戦さの際に矢傷を負った朝長は、無理をしたために傷が悪化し、やがて一歩も歩くことができなくなった。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（送り仮名を省いた箇所がある）

人之兄弟、不レ和而至ニ於破レ家者、或由ニ於父母憎愛之偏一。衣服飲食、言語動静、必厚ニ於所レ愛、而薄ニ於所レ憎、見レ愛者、意気日横、見レ憎者、心不レ能レ平。積レ久之後、遂成ニ深讐一。所謂愛レ之適所ニ以害レ之也。苟父母均ニ其所レ愛、兄弟自相和睦、可ニ以両全一。豈不ニ甚善一。

（『世範』より）

問一　傍線a「或」と傍線b「苟」の読み方として、それぞれ適切なものを、次の中から一つずつ選び出して、その番号をマークせよ。

① まさに　② いやしくも　③ すべからく　④ かつ
⑤ あるいは　⑥ けだし　⑦ かつて

問二　傍線A「見憎者、心不能平」の読みをすべてひらがなで記せ。

問三　傍線B「積久之後」の一句は、どのような状態を言っているのか。最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 愛情が長く偏り続ける状態。
② 全面的保護が長く続く状態。
③ 無関心な態度が長く続く状態。
④ 不信感が長くつのり続ける状態。

問四　傍線C「豈不甚善」を、内容が正しく伝わるように口語訳せよ。

問五　この文章の趣旨として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 一家の繁栄は、親と子の誠実な協力にかかっている。
② 一家の将来は、兄から弟への周到な配慮にかかっている。
③ 一家の繁栄は、親から子への公平な愛情にかかっている。
④ 一家の将来は、兄と弟の緊密な連携にかかっている。